

共感的喜びと妬みの発生に關与する状況要因

教育心理学コース 山本良子

The situational dimensions related to the occurrence of empathic joy and envy

Ryoko YAMAMOTO

To identify situational dimensions relating to the occurrence of triangle emotions, specifically the two emotions 'empathic joy' and 'envy', a survey was conducted to know each emotion in various situations among 209 university students. The results indicated that especially the four dimensions – 'sex of other', 'self-relevance', 'reason that makes the event happen to other' and 'past attitude of other' – related to the occurrence of both emotions.

目次

1. 問題
 - A. これまでの情動研究と三項関係情動
 - B. 本研究の意義と方向性
 - C. 関与が想定された状況要因
2. 方法
 - A. 研究参加者
 - B. 調査時期と手続き
 - C. 質問紙の内容
 1. 場面設定
 2. 他者設定
 - D. 質問紙のタイプ分け
 - E. 回答の方法
 - F. 回答の流れ
3. 結果
 - A. 他者の性別に関する結果
 - B. 自己関与の有無に関する結果
 - C. 出来事の原因に関する結果
 - D. 過去の態度に関する結果
4. 考察
 - A. 他者の性別
 - B. 自己関与の有無
 - C. 出来事の原因
 - D. 過去の態度
 - E. その他の要因
 1. 回答者の性別
 2. 親密度
 3. 立場関係
 4. 出来事の内容
 - F. 本研究の意義と限界

5. 引用文献

1. 問題

A. これまでの情動研究と三項関係情動

これまでの情動研究の主たる対象は、個体自らの利害関心に直接絡む「当事者」の情動であった。現在の情動研究における代表的な理論として、基本情動理論^{1) 2)} や認知的評価理論³⁾ がある。基本情動理論では、生物個体はふりかかった状況に適応するために、状況に最もふさわしい情動を生起させる必要があったことから、基本情動とは個体に何らかの事象がふりかかること、つまり、個体はその事象に対して「当事者」となることが、その生起について暗黙裏の前提になっている。また、認知的評価理論においても、個体の利害や目的に絡まない事象は情動生起の対象とされず、「当事者」として事象に絡むということが情動生起の前提となっている。つまり、現在の情動研究において中軸をなす2つの理論において、潜在的に「当事者として経験される情動」が前提とされているということができ、これまでの情動研究は、「事象」と「事象の直接経験者」との二項関係の性質によって「事象の直接経験者」の情動の生起の有無およびその種類や性質が規定されるという側面に主たる関心を払ってきたといえる。しかし、我々が日常生活において経験する情動は当然こればかりではない。例えば、自らは全く知らない人でもその人に宝くじが当たるなどの良い出来事が起こったとき、その他者の幸福を喜んだり、また反対に妬ましく思ったりと、その時々状況によって様々な情動を経験している。我々は、自分の利害に直

接絡まない、他者に生じた出来事についても、時に多様な情動を経験し得るといえるだろう。こうした、いわば「非当事者」が経験する情動に関して、これまで「共感」の一部分については研究が行われてきた。しかし、「非当事者」が経験する情動には、これまで取り上げられてきた「共感」以外にも多様なバリエーションが想定され、例えば、他者にポジティブな事象が生じた際に経験される情動についてなどはこれまでほとんど検討されていないのが実情である。本研究において問題にしようとする「非当事者」が経験する情動とは、「事象」「事象の直接経験者」、そしてその「事象には直接関係しない第三者」という、三項関係の中で生じるものである。そうした意味で、このような、非当事者が経験する情動を「三項関係情動」と呼ぶことにした。Figure 1 に、三項関係情動が生起される状況における、自己、他者、事象の3項の関係について表した。

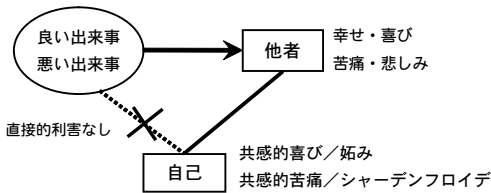


Figure 1 三項関係情動の生起状況

三項関係情動に潜在的に深く関わり得る重要な理論枠として、社会心理学における社会的比較理論⁴⁾を挙げることができる。これまでの社会心理学的研究で社会的比較の結果生じる感情として着目されてきたのは劣等感および優越感がほとんどであった。しかし、Smithは、社会的比較の方向（下方または上方）と、そこで経験される情動が他者の心的状態に同化的か（他者の情動と同質の情動か）あるいは対比的かということ、さらに、情動の焦点が誰に対して向けられているか（自己か他者かそれとも両者か）という3つの観点を組み合わせ、全12種類の情動が社会的比較の結果生じることを示した⁵⁾。従来扱われてきた劣等感および優越感が自己のみに焦点化した情動であったのに対して、Smith⁵⁾が他者と自己および他者の両者にも着目した点は、三項関係情動が自己と他者の両者に着目していることと合致する。Smithは自己と他者の両者に着目した情動として「下方同化的情動（downward assimilative emotions）」「下方対比的情動（downward contrastive emotions）」「上方対比的

情動（upward contrastive emotions）」「上方同化的情動（upward assimilative emotions）」という4タイプの情動が存在し得ることを仮定しているが⁵⁾、実のところ、この4タイプの情動はそれぞれ、三項関係情動の中の特に中核的な情動に対応すると考えられる。つまり、「下方同化的情動」は、他者にネガティブな事象が生じた際にその周りに位置する個体が覚える代理的な苦痛の経験である共感的苦痛（empathic distress）、「下方対比的情動」は、他者が何らかの辛い状況にある場合の「いい気味」といった、ある種の喜びにも似た快感感情、すなわちシャデンフロイデ（schadenfreude）、また、「上方対比的情動」は、他者にポジティブな事象が生じた際に、それを見聞きした個人が覚える相対的にネガティブな情動である妬み（envy）に置き換えることが可能であり、最後に、「上方同化的情動」について、Smith自身は、その代表的なものとして「賞賛（admiration）」や「感激（inspiration）」という情動を挙げているが、本研究においては、それらの情動を包括的に表す術語として、他者が良い状況にある場合に、その他者の幸せを自分自身のことのように他者と共に喜ぶ「共感的喜び（empathic joy）」と呼ぶこととした。これら4種の三項関係情動のうち、共感的苦痛はいわゆる「共感」として、これまで多くの関心が寄せられ研究が進められており、現在までに様々な点について明らかにされてきた（Davis⁶⁾; Hoffman⁷⁾など）。しかし、従来の研究では、他者にネガティブな事象が生じた際に経験される共感のみが取り上げられ、他者にポジティブな事象が生じた際に経験される、本研究でいうところの「共感的喜び」に相当する共感についてはほとんど明らかにされていない。さらに、これまでの研究では、どちらかという「情動としての共感」ではなく、「共感する能力」により大きな関心を払ってきたといえる。つまり、誰にどんな場面で共感するかということより、広く色々な人に対して色々な場面で共感しようという、その人の安定した特性を探ろうとしてきた傾向が見られる。もちろん、共感する能力・特性についてなされてきた多くの研究は、共感のある一側面について多くのことを提示してきたという点において高く評価できるものであるが、一方、その時々多様に経験される「情動としての共感」に着目することによって、従来、見えてこなかった共感の本質的特徴が見えてくる可能性があると考えた。

B. 本研究の意義と方向性

三項関係情動はいずれも社会的な情動である。「今

ここ」において、他者の幸福を喜んだり妬んだり、または他者の不幸を悲しんだり喜んだりすること自体に意味はなくとも、それらの情動を経験することが長期的にみて良好な社会的適応に結びつくという機能を有すると考えられる。自分に利害がなくとも、他者の幸福を共に喜んだり、もしくは他者の不幸を共に悲しむといった共感的な態度をとることは、自己他者間の相互作用にポジティブな効果を与え、さらに、他者への敵対行動を調整することなどから、その他者との関係性の維持や修復をもたらし⁶⁾、関係性の強化に繋がる。また、妬みやシャーデンフロイデは、対人関係の中においてネガティブな意味合いを有することがある一方で、時にむしろ他者との関係性の是正や調整にポジティブに作用する可能性がある。Fehr & Gächterのゲームを用いた研究によると、例えば、自分の利害に関わらなくても、ゲーム上の協力体制を乱す存在がいた場合、自らコストを払ってでもその不正者に対して罰を与えるという、「利他的な罰」を人が積極的に選ぶ傾向のあることが示されている⁸⁾。これは、自己の利害に直接関与しない状況でも、集団の協力体制を犯す者があれば、自己犠牲を負ってでも、不正者を懲らしめ、互恵的な元の協力体制を維持したいという人間の感情のしくみを示すものであり⁹⁾、三項関係情動と同様に、長期的な社会的適応に寄与するメカニズムであるということが出来る。このように、いずれの情動も関係性の維持に関して非常に重要な機能を持つものであり、これらの情動に関して詳細を明らかにすることは、他者との関係を維持・発展させていくための手がかりを得ることにつながり意義のあることと考えられる。

Smith⁵⁾が、社会的比較の結果、人に経験される情動をその情動の持つ意味や比較方向から理論的に体系化して示したことは非常に有意義であるが、しかし、その理論的体系が、実際の人の情動経験に合致するかどうかについては未だ実証されてはいない。さらに、上方または下方といった同じ比較方向状況にあっても、他者の情動に同化的または対比的な情動がなぜ経験され分けられるのか、その理由についても明らかにされていない。それゆえ、Smith⁵⁾の理論的枠組みを踏まえた上で、理論的に想定され得た「三項関係情動」が実際の人々の情動経験と合致するのかどうか、さらに、同一状況において、他者に同化的または対比的な情動が経験される際に、何によってこれらの情動が発生し分けられるのかについて、実証的に検討する必要があると考えた。

三項関係情動を発生し分ける要因として想定されるものに、個人内要因と状況要因がある。個人内要因とは、人格特性や感情傾向といった個人内部に存在するものであり、状況要因とは、他者との関係性や出来事の内容など状況の中に存在するものである。こうした三項関係情動の発生に関与する状況要因を社会的比較の観点から探った先駆的な研究に山本¹⁰⁾がある。そこでは、三項関係情動のうち、共感的喜びと妬みを取りあげており、大学生を対象に、他者に良い事象が生じた際、その両情動が実際に人々に経験されていることを確認している。さらに、他者に良い事象が生じた際それぞれの情動が経験された他者として「友人」が最も多く挙げられ、その他者が目上の人である場合には共感的喜びが経験されるが、対等な立場や目下の人の場合には妬みが経験されやすいこと、また、それぞれの情動が経験された事象として、大学受験への合格や部活動などでの受賞、恋愛成就が多く挙げられたことなどを明らかにしている。本研究では、山本¹⁰⁾で示されたこれらの基礎的知見を活用しながら、共感的喜びと妬みの発生に関与する状況要因をより体系的かつ高精度に明らかにすることを企図した。

C. 関与が想定された状況要因

他者に良い事象が生じたとき、妬みが経験される場合もあれば、共感的喜びが経験される場合もあるのはなぜか。人がある程度安定した感情傾向を持ちながらも、状況によって相反する情動反応をすることから、状況的な要因が情動経験に深く関与していることが考えられた。

まず、社会的比較において、比較相手の選択時に、他者が自分と同性か異性かということは特に重要な類似性であるとされていることから¹¹⁾、情動生起に関与が想定される状況要因として〈他者の性別〉が考えられた。

また、妬みという情動は、不正な手段で他者が利益を得たという主観的な不正感や、他者に有利を手にする価値がないという憤りと共に経験されることが示されており(Heider¹²⁾; Smith⁵⁾など)、他者が有利を手にするまでの経緯や理由を重視する情動といえる。過去の研究でも、社会的比較過程に重要に関連する要因として、他者に事象がどのような理由で生じたのかという〈出来事の原因〉が挙げられており^{13) 14)}、妬みが社会的比較の結果生じる情動であることから、〈出来事の原因〉による情動生起への関与の有無を明らかにする必要があると考えた。

加えて、同じ事象が他者に生じたとしても、他者が自己と親しく仲の良い場合と、そうでない場合では、経験される情動の内容や強度に違いが出ると考えられたため、自己と他者との〈親密度〉も情動生起に関与が想定される状況要因と考えられた。また、山本¹⁰⁾で、他者が自分にとって目上、対等、目下のいずれの立場であるかということが経験される気持ちに関与することが示されたため、自己と他者との〈立場関係〉も情動生起に関与が想定される状況要因と考えられた。さらに、他者に生じた事象をある一事象に限定した場合、その事象内容による偏った影響が想定され得たため、他者に生じた事象の内容を複数設定することにした。妬みの喚起には、喚起場面の内容（喚起領域）が寄与することがすでに示されており¹⁵⁾、複数の事象内容が生起する情動に何らかの関与があると推測されることから、〈出来事の内容〉も情動への関与が想定される状況要因として加えた。

さらに、これまでの研究で、共感や妬みの生起への関与が特に明らかにされてはいないものの、他者に良い事象が生じた際に生起する情動への関与が想定されるものとして、〈自己関与の有無〉と他者の〈過去の態度〉が考えられた。〈自己関与の有無〉とは、その他者に良い事象が生じる以前に、他者の相談に乗ったり、応援したなど、他者の良い出来事になんらかの自己の関わりがあったかどうかについて問うものである。また、他者の〈過去の態度〉は、他者に良い事象が生じる以前に、自己に良い事象および悪い事象が生じた際の、その他者の自己への対応についての経験内容を指し、自己に良い事象が生じた際に他者が共に喜んでくれた場合と無関心な態度を示した場合、自己に悪い事象が生じた際に他者が共に悲しんでくれた場合と無関心な態度を示した場合の4パターンの状況が想定され得た。

本研究では、〈他者の性別〉〈出来事の原因〉〈自己関与の有無〉〈過去の態度〉と、〈親密度〉〈立場関係〉〈出来事の内容〉の各要因が他者に良い出来事が生じた際に経験される気持ちに関与するかどうか、関与する場合どのように関与するかについて明らかにすることを目指した。

2. 方法

A. 研究参加者

大学生と大学院生209名（男性103名、女性106名、平均年齢20.8歳、 $SD=1.53$ ）。

B. 調査時期と手続き

2003年9～10月。授業時間内に個別日記入形式の質問紙を配布し、集団で回答させた。

C. 質問紙の内容

身近な他者に良い事象が生じる複数の場면을想定させ、その各場面において回答者に経験される気持ちについて回答させた。

1. 場面設定 場面は、〈他者性別〉〈出来事の原因〉〈自己関与の有無〉〈過去の態度〉のうちのいずれかの1要因と〈立場関係〉〈親密度〉〈出来事の内容〉の3要因をそれぞれ組み合わせで作られた。〈他者性別〉は、その他者があなたと「同性であった場合」「異性であった場合」の2状況、〈出来事の原因〉は、「その他者が非常に努力していたのをあなたが知っており、その出来事は他者の努力の結果だと思える場合」「その他者のもともとの才能によって得たと思う場合」「運が良かったけどしか思えない場合」「その出来事の基準が相対的に甘く得やすいものであった場合」の4状況、〈自己関与の有無〉は、その出来事が他者に生じる以前、あなたが（好むと好まざるに関わらず結果的に）「その出来事に何らかのかたちで深く関係していた場合」「ほとんどその出来事と関わりを持っていなかった場合」の2状況、そして〈過去の態度〉では、「過去にあなた自身に良い出来事が起きたときに、その他者が自分のことのように喜んでくれた経験があるという場合」「過去にあなた自身に良い出来事が起きたときに、その他者に無関心な態度を示された経験がある場合」「過去にあなた自身に悪い出来事が起きたときに、その他者があなたと共に悲しんでくれた経験があるという場合」「過去にあなた自身に悪い出来事が起きたときに、その他者に無関心な態度を示された経験があるという場合」の4状況を設定し、全12状況である。

他者に生じた良い事象を1種類のみ設定するのは妥当性に問題が生じうると考えたため、〈出来事の内容〉として「賞を得る（受賞）」「就職の内定を得る（就職）」「恋人ができる（恋人）」の3種を設定した。この3種は、山本¹⁰⁾において、共感的喜びと妬みが経験された場合の出来事として特に多く挙げられたものであり、いずれの事象も研究参加者において関心が高く、重要な意味を持つものと考えられた。

2. **他者設定** 事象が生じる他者は、〈立場関係（研究参加者の「先輩」「友人」または「後輩」）と〈親密度（「とても親しい」「普段からよく顔を合わせる」が特別に親しいということでもない）または「普段からよく顔を合わせるがあまり親しくなくどちらかという仲の良くない」〉を組み合わせることで9種の他者を設定した（例えば、「とても親しい先輩」など）。

D. 質問紙のタイプ分け

9種全ての他者に対して、それぞれ3種の出来事の内容について12状況ずつ回答すると質問数が多くなり過ぎるため、質問紙を他者と他者に生じる出来事の組み合わせで3タイプに分けた。質問紙①では、先輩と受賞、友人と就職、後輩と恋人、質問紙②では、先輩と就職、友人と恋人、後輩と受賞、質問紙③では、先輩と恋人、友人と受賞、後輩と就職に、それぞれ他者と出来事の内容の組み合わせに設定した。質問紙各タイプの有効回答者数は、質問紙①67名（男性35名・女性32名）、質問紙②70名（男性32名・女性38名）、質問紙③72名（男性36名・女性36名）であった。

E. 回答の方法

各場面について経験される気持ちについて、他者の幸福を「あなた自身のことのように素直に喜ぶ気持ち」「良かったね、とは思いつつも、内心少し妬ましい複雑な気持ち」「ほとんど喜ぶ気にはなれず、むしろ妬ましさだけを感じる気持ち」「腹立たしさを強く感じる気持ち」の4つのうちから1つ選択させた。これらの気持ちは順に、共感的喜び、共感的喜びと妬みの混じった複雑な気持ち、妬み、怒りを示す。山本¹⁰⁾で、他者の良い出来事について怒りを示す回答が複数見られたため、本研究では、妬みよりも強いネガティブ情動として怒りを加えた。

F. 回答の流れ

質問紙への回答は、各ページで指定されている他者（例えば、とても親しい先輩など）が、各質問紙で設定されている良い出来事（例えば、何かの賞を得るなど）を経験したとき、どのような気持ちを感じると思うか、各状況を思い描いて当てはまる気持ちを1つ選ぶという形式で行われた。

〈例〉あなたは、とても親しい先輩が、何かの賞を得るという良い出来事を経験したときどのような気持ちを感じますか？下のそれぞれの状況を思い描いて、下の気持ちのうち

最も当てはまるものを一つ記入してください。

- ①その先輩があなたと同姓であった場合
- ②その先輩があなたと異姓であった場合
- ③先輩がその賞を得るまでに、非常に努力していたのをあなたが知っており、賞の受賞は先輩の努力の結果だと思える場合 など

上記のような質問項目を1人の回答者につき108項目設定した。フェイスシートでは、年齢、性別などについて尋ねた。

3. 結果

身近な他者に良い出来事が生じたときに経験される気持ちに〈他者の性別〉〈自己関与の有無〉〈出来事の原因〉〈過去の態度〉〈親密度〉〈立場関係〉〈出来事の内容〉の各要因が関与するかどうかを明らかにするため、①2（回答者の性別：男性vs.女性）×3（親密度：とても親しいvs.特別に親しいということでもないvs.あまり親しくなくどちらかという仲の良くない）×3（立場関係：先輩vs.友人vs.後輩）×3（出来事の内容：受賞vs.就職vs.恋人）×2（他者の性別：同性vs.異性）、②2（回答者の性別）×3（親密度）×3（立場関係）×3（出来事の内容）×2（自己関与の有無：関与ありvs.関与なし）、③2（回答者の性別）×3（親密度）×3（立場関係）×3（出来事の内容）×4（出来事の原因：努力vs.才能vs.課題vs.運）、④2（回答者の性別）×3（親密度）×3（立場関係）×3（出来事の内容）×4（過去の態度：良い事象喜びvs.良い事象無関心vs.悪い事象悲しみvs.悪い事象無関心）を独立変数とし、①～④の各従属変数を選択された気持ち（共感的喜び、共感的喜びと妬みが混じった複雑な気持ち、妬み、怒り）とした、全4通りの5要因分散分析を行った。選択された気持ちは、共感的喜びから怒りまで順に、4～1と得点化した。質問紙の構造上、〈回答者の性別〉〈他者の性別〉〈親密度〉〈立場関係〉〈出来事の内容〉が被験者間要因であり、その他は被験者内要因であった。今回の分析では、結果が煩雑になるため、交互作用について〈他者の性別〉〈自己関与の有無〉〈出来事の原因〉〈過去の態度〉に関わる1次のもののみ検討した。

A. 他者の性別に関する結果

他者に良い出来事が生じた際に経験される気持ちに

〈他者の性別〉〈回答者の性別〉〈親密度〉の主効果が有意であった ($F(1, 1740) = 59.49$, $F(1, 1740) = 45.28$, $F(2, 1740) = 465.12$, いずれも $p < .001$)。〈他者の性別〉に関わる 1 次の交互作用は有意でなかった。〈他者の性別〉の主効果は同性の他者 ($M = 3.31$) より異性の他者 ($M = 3.38$) に対して、〈回答者の性別〉の主効果は男性 ($M = 3.25$) より女性 ($M = 3.44$) に共感的喜びが強く経験されやすいことを示した。また、〈親密度〉の主効果について Tukey の HSD 検定での多重比較を行ったところ (以下、多重比較はすべて HSD 検定)、親密度高・中・低の全ての程度間で有意差が見られ、他者との親密度が高いほど、共感的喜びが強く経験されやすいことが示された (親密度高 $M = 3.78$, 中 $M = 3.50$, 低 $M = 2.76$)。

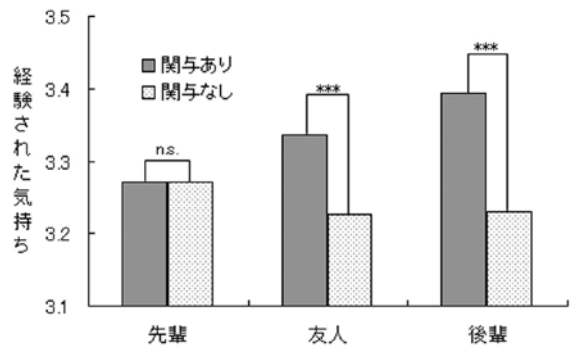
B. 自己関与の有無に関する結果

他者に良い出来事が生じた際に経験される気持ちに〈自己関与の有無〉〈回答者の性別〉〈親密度〉〈出来事の内容〉の主効果が見られ ($F(1, 1736) = 30.61$, $F(1, 1736) = 30.12$, $F(2, 1736) = 332.33$, $p < .001$, $F(2, 1736) = 3.51$, $p < .05$)、〈自己関与の有無〉と〈立場関係〉の交互作用が有意であった ($F(2, 1736) = 8.56$, $p < .001$)。〈回答者の性別〉の主効果は男性 ($M = 3.21$) よりも女性 ($M = 3.37$) に共感的喜びが強く経験されやすいことを示した。〈親密度〉の主効果について多重比較を行った結果、全ての程度間で有意差が見られ、他者との親密度が高いほど、共感的喜びが強く経験されやすいことが示された (親密度高 $M = 3.69$, 中 $M = 3.40$, 低 $M = 2.78$)。また、〈出来事の内容〉の主効果について多重比較の結果、「受賞」($M = 3.24$) と「恋人」($M = 3.33$) 間のみ有意差が見られ、他者が受賞するよりも恋人ができる場合に共感的喜びが強く経験されることが示された (就職 $M = 3.29$)。

〈自己関与の有無〉と〈立場関係〉の交互作用について単純主効果検定を行った結果、立場関係における自己関与の有無の単純主効果が有意となり、多重比較の結果、他者が友人や後輩であるときに限り、自己がその他者の出来事に関与していた場合には共感的喜びが強く経験されるが、関与していなかった場合には弱く経験される傾向にあることが分かった (先輩 $F(1, 1787) = 0$, $n.s.$ 友人 $F(1, 1787) = 15.86$, 後輩 $F(1, 1787) = 31.61$, $p < .001$, Figure 2 参照)。

C. 出来事の原因に関する結果

他者に良い出来事が生じた際に経験される気持ち



注: *** $p < .001$, 経験された気持ちは最大値 4, 最小値 1。値が大きいほど共感的喜びが強く経験されていることを示す。

Figure 2 自己関与の有無と立場関係の交互作用

に〈出来事の原因〉〈回答者の性別〉〈親密度〉〈出来事の内容〉の主効果が見られ ($F(3, 5205) = 583.15$, $F(1, 1735) = 24.82$, $F(2, 1735) = 321.64$, $F(2, 1735) = 8.50$, いずれも $p < .001$)、〈出来事の原因〉と〈回答者の性別〉、〈出来事の原因〉と〈立場関係〉、〈出来事の原因〉と〈親密度〉、〈出来事の原因〉と〈出来事の内容〉の交互作用が有意であった ($F(3, 5205) = 4.85$, $p < .01$, $F(6, 5205) = 5.73$, $p < .001$, $F(6, 5205) = 2.94$, $p < .01$, $F(6, 5205) = 11.48$, $p < .001$)。

〈出来事の原因〉と〈回答者の性別〉の交互作用について単純主効果検定を行った結果、回答者の性別における出来事の原因の単純主効果が有意となり、多重比較の結果、すべての原因間で有意差が見られ、男女ともに、努力、才能、課題、運の順で、共感的喜びが強く経験されやすいことが分かった (男性 $F(3, 5361) = 238.70$, 女性 $F(3, 5361) = 342.15$, $p < .001$)。〈出来事の原因〉と〈立場関係〉の交互作用について単純主効果検定を行った結果、立場関係における出来事の原因の単純主効果が有意となり、多重比較の結果、いずれの立場関係にある他者に対しても、出来事の原因が努力の場合は共感的喜びが最も強く、運の場合は妬みが最も強く経験されやすいことが分かった (先輩 $F(3, 5358) = 257.62$, 友人 $F(3, 5358) = 186.62$, 後輩 $F(3, 5358) = 145.28$, いずれも $p < .001$)。〈出来事の原因〉と〈親密度〉の交互作用について単純主効果検定を行った結果、親密度における出来事の原因の単純主効果が有意となり、多重比較の結果、いずれの親密度においても、出来事の原因が努力の場合は共感的喜びが最も強く、運の場合は妬みが最も強く経験されやすいことが分かった (親密度高 $F(3, 5358) = 171.02$, 中 $F(3, 5358) = 192.32$, 低 $F(3, 5358) = 219.04$, いずれも

も $p<.001$ ）。〈出来事の原因〉と〈出来事の内容〉の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、出来事の内容における出来事の原因の主効果が有意となり、多重比較の結果、いずれの出来事の内容においても、出来事の原因が努力の場合は共感的喜びが最も強く、運の場合は妬みが最も強く経験されやすいことが分かった（受賞 $F(3, 5358) = 252.53$, 就職 $F(3, 5358) = 222.49$, 恋人 $F(3, 5358) = 128.70$, いずれも $p<.001$ ）。

D. 過去の態度に関する結果

経験される気持ちに、〈過去の態度〉〈回答者の性別〉〈親密度〉の主効果が見られ（ $F(3, 5217) = 2602.55$, $F(1, 1739) = 24.45$, $F(2, 1739) = 259.48$, いずれも $p<.001$ ）、〈過去の態度〉と〈立場関係〉の交互作用が有意であった（ $F(6, 5217) = 16.30$, $p<.001$ ）。〈回答者の性別〉の主効果は、男性（ $M = 3.02$ ）よりも女性（ $M = 3.15$ ）に共感的喜びが強く経験されやすいことを示した。また、〈親密度〉の主効果について多重比較を行った結果、すべての程度間で有意差が見られ、他者との親密度が高いほど共感的喜びが強く経験されやすいことが分かった（親密度高 $M = 3.41$, 中 $M = 3.16$, 低 $M = 2.68$ ）。

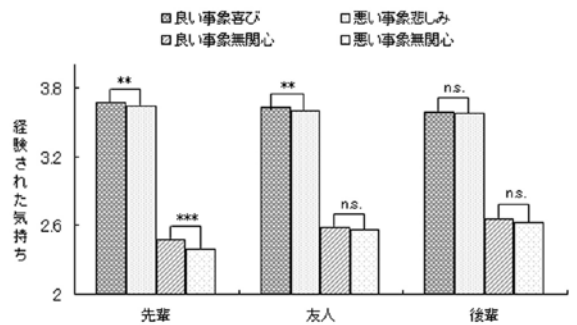
〈過去の態度〉と〈立場関係〉の交互作用について単純主効果検定を行ったところ、立場関係における過去の態度の単純主効果が有意となり、多重比較の結果、すべての立場関係にある他者について、その他者に自己に良い出来事が生じた際に自己と共に喜んだり、悪い出来事が生じた際に共に悲しんだりといった態度を示された経験のある場合、無関心な態度を示された経験のある場合よりも共感的喜びが強く経験される傾向があることが分かった（先輩 $F(3, 5370) = 1158.00$, 友人 $F(3, 5370) = 828.02$, 後輩 $F(3, 5370) = 675.66$, いずれも $p<.001$, Figure 3 参照）。

4. 考察

本研究では、他者に良い事象が生じた際、その事象に直接の利害関係がない非当事者に経験される共感的喜びや妬みといった気持ちに、〈他者の性別〉〈自己関与の有無〉〈出来事の原因〉〈過去の態度〉〈親密度〉〈立場関係〉〈出来事の内容〉の各要因がいかに関与するかについて明らかにすることを目的とした。

A. 他者の性別

他者に良い出来事が起こったとき、自己と同様より



注：*** $p<.001$, ** $p<.01$, 経験された気持ちは最大値 4, 最小値 1。値が大きいほど共感的喜びが強く経験されていることを示す。すべての立場関係において、良い事象喜びと悪い事象悲しみは、良い事象無関心、悪い事象無関心とそれぞれ $p<.001$ で有意差を示した。

Figure 3 他者の過去の態度と立場関係の交互作用

異性の他者に対して他者の幸福を共に喜ぶ気持ちが強く経験されやすく、反対に、異性より同性の他者に対して他者の幸福を妬む気持ちが強く経験されやすいことが明らかとなった。これは、妬みという情動が、通常、他者との比較過程で生じるという特徴を持ち、比較対象には自分と類似した他者が選ばれやすく⁴⁾、類似点を少しでも多く有する同性の他者が比較対象となりやすいという研究結果に一致するものである¹¹⁾。

B. 自己関与の有無

他者が友人と後輩である場合に限って、その他者の良い出来事に自己が関与したかどうかにより経験される気持ちの内容に違いが見られた。これは他者が目上である先輩よりも、対等や目下の立場である友人や後輩の方が、良い出来事が生じる以前から、その他者の相談に乗ったり、応援するなど自己関与する機会が多いためではないかと考えられた。特に、後輩の良い出来事に自己が関与した場合において共感的喜びが最も強く経験されていたが、これは、自己と対等な立場にあり比較対象となりうる友人よりも、比較対象となりにくい後輩に対してより素直に喜びが経験されるためと推測された。

C. 出来事の原因

出来事の原因は他の様々な要因と交絡して、共感的喜びや妬みなどの経験される気持ちに関与することが明らかとなった。どの要因と交絡する場合においても、他者の努力によって良い出来事が生じた場合には共感的喜びが最も強く、たまたま運が良かっただけで良い出来事が生じた場合には妬みが最も強く経験され

ており、どのような理由で他者に良い事象が生じたかという経緯が経験される気持ちに深く関連することが分かった。このことから、人が他者の幸福を共に喜ぶために、「幸福を得るために他者が努力をした」という評価、つまり、その他者に幸福を得るだけの価値があると認めることが必要になることが示唆された。本来自分とは直接関係がなく、それほど強い情動反応に至らないはずの他者に生じた事象に対しても、努力という苦勞に対する報酬として他者の幸福を捉えれば、賞賛や尊敬など他のポジティブ情動を含めて共感的喜びが生起されやすくなり、一方、たまたま運が良かっただけで他者自身の苦勞が付随していないと評価される場合には、努力をしていない幸福を得るに値しないはずの存在が幸福を手に入れているという不満や不正感とともに特に強い妬みが生起されることがうかがえた。自分自身には直接利害関係がない事象であるにも関わらず、幸福に対する他者の努力の有無を瞬時に評価する情動生起メカニズムが人に存在することが明らかになったといえるだろう。さらに、〈出来事の原因〉は〈出来事の内容〉と交絡を示したが、これより、人が単に他者に生じた事象の内容だけで情動を経験しているのではなく、「幸福の価値（得難いものか否か）」や「幸福を得るだけの正当性の有無（幸福を得るに値する存在か否か）」といった、その事象が他者に生じた経緯や背景までも吟味した後に情動を経験していることがうかがえた。

D. 過去の態度

他者に良い出来事が起こる以前の過去に、自己に生じた事象に対して他者が共に喜んだり悲しんだという他者の態度が、他者の良い出来事に対して経験される自己の気持ちの内容に関与することが明らかとなった。過去に自己の幸福や不幸に共感的な態度を示してくれた他者に対しては、互惠性の観点から、次は自分が他者に共感的な態度を示そうという気持ちが働いていることが考えられる。これより、人が他者の幸福に対して気持ちを体験するとき、その場における状況からのみでなく、それまでに経験された他者の自己への態度といった点も含めて、総合的に評価し反応していることが示唆された。

E. その他の要因

1. 回答者の性別 男性よりも女性に共感的喜びが強く経験されやすことが分かった。これは、女性が男性よりも他者との関係性を重視し、協調的な態度を

示す傾向があることを支持する結果である。

2. 親密度 他者が親しければ親しいほど、共感的喜びがより強く経験されていた。他者と親しく仲が良いということはつまり心理的距離が近いということであり、情動が経験される以前にすでにポジティブな対人感情が形成されているためと考えられた。また、Heider¹²⁾のバランス理論の観点から考えるとき、他者と親しいという正の関係性を均衡に保つために他者の幸福をポジティブに受け入れた結果、共感的喜びが経験されるためとも考えられた。

3. 立場関係 山本¹⁰⁾では、目上の他者に共感的喜び、対等や目下の他者に妬みが経験されやすことが示されたが、本研究において、自己と他者との立場関係は、自己関与の有無や出来事の原因、過去の態度の各要因と交絡しながら、経験される気持ちに関わることが明らかとなった。このことより、他者が目上か目下か対等かということのみならず、人は、同時に、自分がどれほどその他者の出来事に関与したか、なぜ他者に良い出来事が生じたのか、過去において他者は自己に対してどのような態度を示したのかという点について評価し、情動が経験されていることが示唆された。

4. 出来事の内容 一部の結果において、他者が受賞するよりも恋人ができる場合に共感的喜びが強く経験されやすことが示された。これは、受賞という事象がそれほど日常的なことではないため特別な事象として妬みが経験されやすく、また、他者に恋人ができるという出来事は回答者が実生活において経験したことがある可能性が高く、場面の想定が受賞に比べて容易だったためと考えられた。

F. 本研究の意義と限界

本研究では他者に良い出来事が生じた際に経験される気持ちに関わる状況要因を明らかにした。中でも仮説的に想定されるに留まっていた〈自己関与の有無〉〈出来事の原因〉〈過去の態度〉の3要因の共感的喜びと妬みの生起への関連を本研究で体系的な形で明らかにしたことは大変意義があるだろう。しかし、数点の限界も存在する。まず、研究方法に場面想定法を用いたことから、ここで得られた結果は、実際に経験された情動を測定したものではなく、あくまでも仮定状況において予測される反応についての測定であり、得

られた結果のように実際に人が情動を経験することを示してはいない。次に今回は、〈他者の性別〉〈自己関与度〉〈出来事の原因〉〈過去の態度〉の各要因の情動への関与を明らかにするものであり、4 要因内の交絡について調べるものではなかった。このため、今後はこれらの要因が全て介在する場合にいかに関与を経験へ関与するかについて検討する必要がある。また、非当事者によって経験される共感的喜びや妬みの経験には、本研究で想定した以外の状況要因の関与も可能性として当然考えられるだろう。さらに今回は、共感的喜びと妬みに関わる状況要因に限定して研究を行ったが、三項関係情動全般について明らかにしようとするとき、共感的苦痛とシャーデンフロイデに相応する、他者に悪い事象が生じた場面において経験される情動についても調査する必要がある。今後は共感的苦痛とシャーデンフロイデを取り上げ、これらの情動生起に関わる状況要因についても明らかにする研究を行っていく計画である。

(指導教員 遠藤利彦准教授)

5. 引用文献

- 1) Ekman, P. 1992. An argument for basic emotions. *Cognition and Emotions*, 6, pp. 169-200.
- 2) Izard, C. E. 1991 "The psychology of emotions" New York: Plenum Press.
- 3) Lazarus, R. S. 1968 "Emotions and adaptation: conceptual and empirical relations" Lincoln: University of Nebraska Press.
- 4) Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, pp. 117-140.
- 5) Smith, R. H. 2000 Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & Wheeler (Eds.), "Handbook of social comparison: theory and research" New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers. pp. 173-200.
- 6) Davis, M. H. 2004 Empathy: Negotiating the border between self and other. In Tiedens, L. Z. & Leach, C. L. (Eds.) "The social life of emotions" Cambridge University Press: Cambridge, UK. pp. 19-42.
- 7) Hoffman, M. L. 1984 Interaction of affect and cognition in empathy. In C. E. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc(Eds.), "Emotions, cognition, and behavior" Cambridge: Cambridge University Press. pp. 103-131.
- 8) Fehr, E. & Gaechter, S. 2002 Altruistic punishment in humans. *Nature*, 415, pp. 137-140.
- 9) 遠藤利彦 2005 感情に潜む知られざる機能とは. *科学*, 75, pp. 700-706.
- 10) 山本(西隅)良子 2005 "三項関係情動"の生起メカニズムを探る: 共感的喜び・妬みの状況要因について. *京都大学大学院教育学紀要*, 50, pp. 371-385.
- 11) Miller, C. T. 1984 Self-schemas, gender, and social comparison: A clarification of the related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, pp. 1222-1229.
- 12) Heider, F. 1958 "The psychology of interpersonal relations" New York: Wiley. (大橋正夫(訳) 1978『対人関係の心理学』誠信書房)
- 13) 坪田雄二 1993 原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響. *実験社会心理学研究*, 33, pp. 60-69.
- 14) 吉川肇子 1991 成功, 失敗場面における比較対象の選択傾向の差異: 社会的比較か継時的比較か? *社会心理学研究*, 6, pp. 148-154.
- 15) 澤田匡人 2006 『子どもの妬み感情とその対処』進曜社.